前　　言

本號のタイトルは「出土文獻と秦楚文化」である。これは本號の執筆者を含む研究グループ「上海博楚簡研究會」が 2004 年 3 月に創刊した雜誌のタイトルでもある[1]。この研究會は 2003 年 4 月に發足した。發足の契機となったのは、上海博物館が購入した竹簡群の報告書である馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)(上海古籍出版社、上海、2001 年 11 月）の出版である。當初研究會を主導したのは池田知久氏（現・東京大學名譽教授）だったが、池田氏が多忙ということもあり、間もなく谷中信一氏（現・日本女子大學名譽教授）が實質的なリーダーとなり、ベテラン研究者のみならず大学院生・ポスドクといった若手の積極的な參加を得て活動を繼續してきた。扱う資料も當時はその名の通り上博楚簡を主としたが、その後、他にも新發見の出土資料が增えたこともあり、出土資料であれば特に分け隔てなく研究對象とするようになった。現在では上博楚簡がとりあげられる割合はむしろ低く、清華大學が所藏する戰國竹簡である清華簡の方が多い。この研究會は東京都内で 1〜2 ヶ月に 1 回のペースで開催され、その成果として上記タイトルの雜誌を 1〜2 年に 1 號、近年では毎年發行して今日に至っている。その間、研究會の中で科研費申請資格のある參加者は谷中信一氏を研究代表者として、科研費

[1]「上海博物館藏戰國楚竹書」の略稱は、今日では「上博楚簡」とするのが一般的であるが、その公表直後は未だ定まらず、本研究會の名稱としては、我々の研究グループにおける若干の議論の後、「上海博楚簡」とした經緯があり、それが現在まで至っている。なお科研費の研究グループ名としては「出土資料と漢字文化研究會」(http://mcm-www.jwu.ac.jp/~skproject/) の名称を用いている。

を２度獲得し[2]、日本國内外の研究者の協力を得ながら研究活動に邁進してきた。あわせて2009年より、この科研費の代表者･分擔者を中心として東京大學東洋文化研究所の班研究「中國古代文獻の成立に關する多角的研究」を立ち上げ、班員を徐々に增やしつつ上記研究會と連動して活動した。研究會發足初期にこの活動を主導したのは中國思想史畑の研究者が主であったが、中國文學や歴史學の研究者が加わり、更には宗教史學や考古學といった多様なディシプリンが集う場となっていった。それはつまるところ、中國出土資料研究は特定の學問分野の知見のみにては到底なし得ない複雜かつ多様性を有するものだからである。

本號は論文７本からなっている。我々研究グループの特色の一つは、譯注を非常に重視するところにある。譯注は論文ではなく、研究業績として必ずしも高い評價を受けない嫌いがある。しかし中國出土資料研究においては、研究者自ら原資料を讀み込み譯注を作成して研究の基盤を構築することなくしては、嚴しい檢證に堪え得る水準の論文を執筆し得ないのである。本號で論文を執筆している者も、通常は別の場で譯注を発表している。紙幅の都合から譯注は本號に掲載できなかったのであるが、そういう姿勢を反映して我々のもとでは譯注と論文とは對等に扱われている。

我々の研究グループには上記科研費メンバーを始めとしてベテラン研究者も集うが、本號では新鮮な目綫による新たな研究の展開を期し、執筆者の年齡においてはあえて低めを主とした。執筆者と論考タイトルは次の通りである。（敬称略）

今田裕志「上博楚簡『君子爲禮』における德目の分化」：上博楚簡『君子爲禮』における仁・禮・義といった德目のあり方を論じる。『論語』が仁を最上の德目とすることとは異なり、『君子爲禮』では仁は絶對的ではなく、他の德目との關係に應じた役割を有するに過ぎないものであり、それは『荀子』『禮記』や郭店楚簡『六德』の仁に通じるとする。

---

[2] 平成20～22年科学研究費補助金（基盤研究（B））「新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相―漢字文化圏の中の地域性―」（研究代表者：谷中信一）、平成26～29年JSPS科研費基盤（B）26284010「Multi-Disciplinary Approachによる新出土資料の總合的研究」（研究代表者：谷中信一）。

海老根量介「戰國期楚における「日書」の利用について」：中國古代において流行していた數術書「日書」について、戰國時代楚の唯一の同時代資料である九店楚簡『日書』をとりあげて檢討する。春秋後期から戰國前期にかけての政治・社會の變化の中で、文書行政が開始・展開され、それに伴って漢字が様々な場で使用された。書籍が普及していくと、世族のような社會の最上層が技能集團を通して獨占していた占術も書籍化されて、マニュアルとしての「日書」となり、戰國中期には下級官吏までもが利用するようになったとする。

戸内俊介「甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異」：甲骨文における非對格動詞（目的語をとれば能動態的または使役態的、とらなければ受動態的な用法となる動詞）と「不」「弗」との使用實態とを比較檢討する。春秋戰國時代の中國語では「弗＝不＋之」（併合説）が成立するが、甲骨文のような殷代中國語ではそれとは異なる機能的差異が認められ、「不」はパーフェクト（完了）性否定詞、「弗」は使役に對する否定詞だとする。

宮島和也「試論合音詞“諸”在出土文獻中的分布及其含意」：これは中國語で書かれているが、掲載文が日本語に限らないのも『出土文獻と秦楚文化』の特色である。先秦秦漢時代の中國語を使用する出土文獻・傳世文獻に見える合音詞（二語が合して一語として發音される單語）「諸」について、それが魯國もしくは儒家と密接な關係があり、魯の方言の特徴を有することを論ずる。

谷中信一「清華簡『命訓』の思想と成立について」：『逸周書』は西晉武帝期前後に出土したとされる戰國魏の汲冢書に由來するともされる傳世文獻である。その命訓篇と類似の内容をもつ清華簡『命訓』について考察し、それが戰國時代の齊の思想、特に管子學派と關係があるが、齊で書寫されたと考えられる『逸周書』命訓篇とは異なり、齊由來の文獻を楚文字を用いて新たに抄寫されたものとする。

羅濤「北大簡《妄稽》篇補釋及編聯問題」：本稿は中國大陸の若手研究者によるものである。北京大學が收藏する北大漢簡の一篇『妄稽』について、字釋・編聯に關する様々な問題を論じる。これはいわば譯注のトピックを集めたもので「札記」的性格を有する論考であり、こうしたスタイルも我々の研

究領域では一般的なものである。

小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』に關する初歩的考察」：清華簡『鄭武夫人規孺子』の譯注を基礎として『鄭武夫人規孺子』の資料的性格を論じる。それは戰國時代、楚地域において若干手が加えられたか、或いは楚地域以外の材料をもとに楚地域で編纂された可能性があり、春秋前期における鄭國の理想的な幼君即位のあり方を描いた一篇であって、戰國時代の楚國において獨自の歴史觀が構築されるにあたり、中原諸國に受け入れられる歴史認識が取捨選擇の上利用されたとする。

今田・谷中は思想史、戸内・宮島・羅濤は文學・言語學、海老根・小寺は歴史學を專門としている。上記のみにても、言語學領域のミクロなテーマから、思想や歴史のマクロな課題まで、執筆者の興味關心が多岐に亘ることがお分かりいただけることだろう。さりながら、例えば文法上の成果が譯注やそれに基づく論文に適用され得るように、實際のところこれらの研究成果は相互に補完し合う關係にある。そして現在の我々の科研プロジェクトもその關係に立脚した “Multi-Disciplinary Approach” により遂行されているところである。

出土資料研究はいわば高山を登攀するが如きものであって、そういう意味では我々は未だ麓付近を彷徨するのみであることを懼れる。讀者の叱正を請う。

2018 年 3 月

小　寺　　敦